

神奈川漢詩連盟

# 白樂天の詩と人生

平成三十年五月三十日

石川忠久

賦得古原草

送別

古原の草を賦し得たり

送別

離離原上草

一歳一枯榮

野火烧不尽

春風吹又生

遠芳侵古道

晴翠接荒城

又送王孫去

萋萋滿別情

離離たり原上の草

一歳に一たび枯榮す

野火烧けども尽きず

春風吹いて又た生ず

遠芳 古道を侵し

晴翠 荒城に接す

又た王孫の去るを送れば

萋萋として別情満つ

春風

春風先發苑中梅

桜杏桃梨次第開

薺花榆莢深村裏

亦道春風爲我来

春風

春風先ず發く苑中の梅

桜杏桃梨 次第に開く

薺花榆莢 深村の裏

亦た道う 春風 我為に來たると

八月十五日夜

禁中独直

对月憶元九

八月十五日の夜

禁中に独り直し

月に対して元九を憶う

銀台金闕夕沈沈

独宿相思在翰林

三五夜中新月色

二千里外故人心

渚宮東面煙波冷

浴殿西頭鐘漏深

猶恐清光不同見

江陵卑濕足秋陰

銀台金闕 夕沈沈

独宿相思いて翰林に在り

三五夜中 新月の色

二千里外 故人の心

渚宮の東面 煙波冷やかに

浴殿の西頭 鐘漏深し

猶お恐る 清光同じくは見ざらんことを

江陵は卑濕にして秋陰足し

香炉峰下新ト山居  
草堂初成偶題東壁

香炉峰下新たに山居をトし  
草堂初めて成り 偶東壁に題す

日高睡足猶慵起

小閣重衾不怕寒

遺愛寺鐘欹枕聽

香炉峰雪撥簾看

匡廬便是逃名地

司馬仍爲送老官

心泰身寧是帰処

故郷何独在長安

日高く睡り足りて 猶お起くるに慵し

小閣に衾を重ねて 寒さを怕れず

遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き

香爐峯の雪は簾を撥て看る

匡廬は 便ち是れ名を逃るるの地

司馬は 仍お老いを送るの官為り

心泰く身も寧きは 是れ帰する処

故郷 何ぞ独り長安にのみ在らんや

送王十八帰山  
寄題仙遊寺

曾於太白峰前住  
數到仙遊寺裏來  
黒水澄時潭底出  
白雲破処洞門開  
林間煖酒燒紅葉  
石上題詩掃緑苔  
惆悵旧遊無復到  
菊花時節羨君迴

王十八の山に帰るを送り  
仙遊寺に寄題す

春題湖上

湖上春来似画図  
乱峰圍繞水平鋪  
松排山面千重翠  
月点波心一顆珠  
碧毬線頭抽早稻  
青羅裙帶展新蒲  
未能拋得杭州去  
一半勾留是此湖

春湖上に題す

湖上 春来たりて 画図に似たり  
乱峰 圍繞して 水平らかに鋪く  
松は 山面に排す 千重の翠  
月は 波心に点ず 一顆の珠  
碧毬の線頭 早稻を抽き  
青羅の裙帯 新蒲を展ぶ  
未だ杭州を抛ち得て去る能わず  
一半勾留するは是れ此の湖

卯時酒

仏法讚醍醐  
仙方誇沆瀣  
未如卯時酒  
神速功力倍  
一杯置掌上  
三嚙入腹内  
煦若春貫腸  
喧如日炙背  
豈独支体暢  
仍加志氣大  
當時遺形骸  
竟日忘冠帶

卯時の酒

仏法には醍醐を讃し  
仙方には沆瀣を誇る  
未だ如かず 卯時の酒  
神速にして 功力の倍するに  
一杯掌上に置き  
三嚙腹内に入れば  
煦たること春の腸を貫くが若く  
喧なること日の背を炙るが如し  
豈独り支体の暢ぶるのみならんや  
仍お加うるに志氣大いなり  
當時に形骸を遺れ  
竟日 冠帯を忘る 【下略】

対酒

蝸牛角上争何事  
石火光中寄此身  
随富随貧且歡樂  
不開口笑是痴人

酒に對す

蝸牛角上 何事をか争う  
石火光中 此の身を寄す  
富に随い 貧に随いて 且く歡樂せん  
口を開いて 笑わざるは是れ痴人

